

島根の地域医療



今回の紙面

発行者 島根県健康福祉部
医療政策課医師確保対策室

第81号

2025/11/30

SHIMANE
AKAHIGE
BANK



- ◆ 地域医療最前線 NO.86 「地域医療構想に沿って松江市立病院は自立進化組織を目指す」
《松江市立病院 病院長 久留一郎》
- ◆ 研修医のページ NO.62 「私が医師を目指したきっかけ」
《島根県立中央病院 臨床研修医 佐藤光夏》
- ◆ 看護師さんのページ NO.64 「多職種連携による複合的な在宅サービスの取組」
《有限会社ホットケアセンター 代表取締役 山根優子》
- ◆ 事務長さんのページ 「益田赤十字病院に赴任して」
《益田赤十字病院 事務部長 細木進》

【病院を取り巻く現状】少子高齢化による人口減少、医療・介護ニーズの多様化、そして医療人材の不足や都市部への偏在は、地域医療を将来にわたって持続させるうえで極めて深刻な課題です。松江圏域においても、生産年齢人口の減少が進む一方で、高齢者人口は2040年にかけてさらに増加する見込みです。この変化に適切に対応するためには、従来の「病院完結型」の枠を超えて、地域全体で患者を治し、支えていく「地域完結型」の医療提供体制へと発展させることが不可欠です。第8次医療計画に基づいて進められる新たな地域医療構想では、医療機関の機能分化と前方・後方連携の強化と円滑化、医療人材の確保と育成、地域を越えた救急搬送システムの整備、ICTの積極的な活用、さらには地域医療



地域医療構想に沿って松江市立病院は自立進化組織を目指す
松江市立病院

病院長 久留一郎

地域医療最前線 No.86

構想そのものへの市民理解を深め取り組みが展開されています。こうした一連の施策は、地域社会が直面する医療需要の変化に対応し、将来にわたって安心できる医療基盤を築くことを目指しています。

【病院の取り組み】この地域医療構想の中心的なキーワードは「連携以上、統合未満」です。松江圏域では当院を含む10病院が協議を重ね、2024年に「医療機能連携協定」を締結しました。これにより、各病院の役割分担が明確となり、地域全体で医療資源を効率的に活用する体制が整いつつあります。病院同士の協力関係に加え、診療所や介護施設との連携を強化することで、医療・介護・予防・住環境といった要素を切れ目なく結びつける地域包括ケアを推進し、地域完結型医療の具現化を進めています。しかし現実には、在宅から直接急性期病院に入院する高齢患者が少なくありません。誤嚥性肺炎、心不全、脳梗塞、尿路感染症、骨折といった高齢者に多い疾患で救急搬送される患者の多くは介護が必要としています。したがって急性期病院には、医療・看護に加えて介護の視点を持つた医療人材を育成し、医療と介護を一体的に支える「急性期多機能病院」としての能力をさらに高める必要があります。こうした機能強化こそが、地域全体の持続可能な医療提供体制の基盤となります。

信頼される病院」の実現を目指します。特にチーム医療の質向上や人材育成、職場環境の改善は喫緊の課題であり、現場の声を丁寧に拾い上げ、双方向のコミュニケーションを重ねることで、職員が働きやすい環境を整え、人の輪をより強固にしていきます。看護局ではキャリア支援専門看護師、キャリアコンサルタントを配置しました。人材確保や定着支援、研修企画、研究支援、広報活動など多面的な役割を担い、さらに職員が気軽に訪れることのできる「サードプレース」としての機能も果たします。

松江市立病院を「自立進化組織」として育て、地域に信頼される急性期多機能病院として発展させていくこ

【今後の抱負】当院では、①患者中⼼の質の高い医療の提供、②診療とケアの確実性・安全性の向上、③職能の柱としています。これらを「病院の設計図」として絶えず点検・修正を重ね、基本理念である「市民への奉仕を第一とし、市民から愛され、信頼される病院」の実現を目指します。特にチーム医療の質向上や人材育成、職場環境の改善は喫緊の課題であり、現場の声を丁寧に拾い上げ、双方向のコミュニケーションを重ねることで、職員が働きやすい環境を整え、人の輪をより強固にしていきます。看護局ではキャリア支援専門看護師、キャリアコンサルタントを配置しました。人材確保や定着支援、研修企画、研究支援、広報活動など多面的な役割を担い、さらに職員が気軽に訪れることのできる「サードプレース」としての機能も果たします。

研修医のページ

No.62

私が医師を目指したきっかけ

島根県立中央病院

臨床研修医 佐藤 光夏



島根県立中央病院臨床研修医の佐藤光夏です。よろしくお願いいたします。私は出雲生まれ、出雲育ち、大学だけ鳥取大学に進学し米子市に住みましたが卒業後はすぐに出雲に帰り、中央病院で臨床研修をしています。山陰から出たことがなく、おそらく今後も出るつもりはない、山陰大好き人間です。現在は初期研修医としていろいろな診療科を月単位でローテーションしており、日々新しい学びがたくさんあり、充実した研修をしています。

私が医師を目指したきっかけとしては一番印象に残っているのは、小学校低学年のときの出来事です。その頃曾祖母が隠岐諸島の知夫村で一人暮らしていましたので、祖父はゴールデンウイークや夏休みになると私と3歳年下の従弟を連れて知夫村に遊びに行つてくれました。ある年の夏休み、祖父、祖母、従弟と四人で知夫に帰っている際、車で見晴らしの良い赤はげ山へ行くことになりました。私と従弟は途中で車を降り、徒歩で先回りすることにしました。頂上が近づき、木がなくなり雑草がのびて道路の方に覆い被さっている道を歩いていたところ後ろから祖父母の乗った車が追いついたことに気づき、車に追い越されないように慌てて走り出しました。後ろからどうぞっという音と共に聞こえる泣き声に振り返ると、草に隠れていた道路脇の小さな溝にはまり転ん

でいる従弟、近づくとすねから出血しており肉がえぐれて白い組織が見えているのがわかりました。大声で呼んではみたものの、笑顔で気づかず追い越し走り去つていく祖父母、「なんかマズイ」。転んだ痛みで歩けない従弟と見たことのないくらいの深い怪我にどうしていいかわからない私。その後なかなか登つてこないことに気づいた祖父母が状況を把握し、慌てて車で駆け込んだ知夫診療所には、医師がたつた一人しかいませんでした。その医師がえぐれた深い傷を綺麗に縫い治し、従弟も泣き止みその後は普段通りの生活を送れたことに私はとても感動しました。私は泣いている従弟に何もできず不安でオロオロしているだけだったのに、たつた一人で傷を綺麗に縫い上げてすごい、しかもこんな小さな島でも医師がいて困つたら助けてくれるのがすごいと思い、医師という職業に漠然とした憧れを抱きました。

ここから糾余曲折を経て医学部に進学し、大学6年生の選択実習では地域医療を選択しました。山間部の診療所や小さな総合病院で1ヶ月間研修した中で、患者さんの生活環境や家族構成などにも目を向けて、疾患を治すことだけではなく寄り添い一緒に

考えていくような診療を知つて面白いなど感じ、総合診療医を目指すようになりました。臨床研修では、医師として患者さんやその家族と話し合いながら、治療だけでなくどのように生

活していくか、最後を迎えるときの方針などを決めていくことを経験して、改めて難しさと面白さを知りました。来年度からは臨床研修が修了し専攻医として働き始める予定です。できることわからぬことだらけですが、頑張っていこうと思っています。

勤務していた時は、在宅サービスが乏しく、医療ニーズがある重度の方の場合は、退院よりも転院が多い時代でした。そのような状況の中、一人の乳が



看護師さんのページ

No.64

多職種連携による複合的な在宅サービスの取組

有限会社ホットケアセンター
代表取締役 山根 優子



ん終末期状態の方から「何もできないけど、家に帰れば寝ていても子供に行つてらっしゃい、お帰り、と声をかけてやれる。子供のために家に帰る」と強い思いを聞きました。

その為、急ぎ地域の保健師さんに繋げて退院となつたのですが、この時の経験がその後の私の看護師としての方向性を決めたように思います。

縁あつて浜田市へ移住となつた時は、迷わず「介護、看護が必要な在宅で暮らす方を支援しよう」と、訪問看護を中心に地域のサービスを学び、2004年に会社を創設しました。地域のニーズに応える形でサービスを開拓してきた現在、訪問看護・訪問介護・居宅介護支援・看護小規模多機能（2箇所）・（リハビリ特化型）地域密着型通所介護・有料老人ホーム・定期巡回随時対応型訪問介護看護の7つの事業を運営しています。

職員は総勢74名で、うち看護職が20名、セラピスト5名とケアマネジャー5名、介職・事務職等です

浜田市も独居や高齢世帯の増加、病床や訪問診療医の減少など、医療や介護環境が大きく変化し、近隣市や県外への入院等を余儀なくされています。

その為昨年、地域で最期まで暮らし続けられるように、2箇所目の看護小

規模多機能を開設しました。今、お看取りの方がとても増えています。

弊社は4つの事業所で24時間の緊急連絡体制を整え、看護小規模多機能は緊急短期利用も対応しています。

微力ながら在宅生活における安心が高まるよう努めていますが、主治医をはじめ、地域の関連機関との連携が支えとなっています。

また2023年より浜田市シルバーハウジング生活援助員派遣事業を受託し、相談・見守り緊急対応等も行っています。関連して、長年行っている「ほつと相談室」の経験を活かし「出張・まちの保健室」を市内4カ所で毎月開催しています。

保健室ですから、もちろん看護師がおりますが、介護員を中心の、法人内の他事業所職員も巻き込んだ多職種運営です。

健康チエック・ミニ講座・体操・歌やゲーム、お茶等で楽しい時間を共有しています。

開催年数を重ね、シルバーハウジング以外の近隣住民の参加も増え、地域のつながりの場となっています。

はじめ戸惑っていた職員達のたぐましい成長に驚き、喜んでいます。

創業以来「ケアを必要とする方に、必要なサービスを届け、地域で暮ら

し続けることができるよう支援する」ことを目指してまいりました。

今後も良質で温かいサービスを提供して地域に貢献するためには、ご利用者やご家族の声に耳を澄まし、その声をしっかりと受け止め、地域の関係機関の皆様との連携を深めていくことが大切と思っています。

今後とも宜しくお願ひ致します。

保健室は、もちろん看護師がおりますが、介護員を中心の、法人内の他事業所職員も巻き込んだ多職種運営です。

事務長さんのページ



益田赤十字病院に赴任して

事務部長 細木 進



この4月に

益田赤十字病院の事務部長

を拝命し、当

院が所在する

益田市に暮ら

して早半年。

吉田類の酒場放浪記よろしく街を彷徨い、ひとり酒。これまで市内の数多くの酒場や飲食店を探訪。旨い酒、旨い肴に、客同士あるいは客と店主店員が織りなす石見弁のリズムが小気味よい。地域に根差す石見神楽のリズムに重なる、とは言い過ぎか…。そんな店内で、ときには診療や手術、入院など機関の皆様との連携を深めていくことが大切と思っています。

当院は、284床24診療科を有し、人口約53,000人、面積は香川県並みの益田二次医療圏（益田市、津和野町、吉賀町）と、隣接する一部地域の急性期医療を担っています。そして、お産や小児救急など地域唯一の機能を有する中核病院として、地域内の各病院と連携し、機能分担を図りながら地域の医療を支えています。

地域医療の確保を図る上で、次世代を担う医療従事者の養成にも力を入れており、益田市など地元からのご支援もいただきながら、医師や看護師、薬剤師など多職種の医療職を目指す学生の見学や実習をはじめ、臨床研修病院として研修医の受け入れなどを積極的に行っています。また、医師確保が課題となる中、「総合診療

専門研修プログラム」の基幹病院として幅広い視野を持つ医師の育成も行っています。

日本赤十字社としての責務である災害医療については、D M A T や赤十字救護班の編成による被災地の支援や、定期的な訓練などを通じて大規模災害時にも医療機能を維持できるよう備えています。

今回は、頑張っている職員のための福利厚生の視点でいくつか紹介します。各病院でも様々な制度があると思いますが、日本赤十字社の永年勤続表彰では、10年、20年、30年の節目に年数に応じた旅行券の贈呈や特別休暇の取得ができ、今年度もこの制度を利用して大阪・関西万博を楽しんだ職員もいます。

また、サークル活動も活発で、ゴルフやテニス、ランニング、サイクリングといった同好会があり、今年度、群馬県で開催の全国赤十字病院スポーツ大会では、当院から卓球とフットサルの同好会が出場します。



院内災害対応訓練の集合写真

編集後記

『島根の地域医療』第81号をご覧いただきありがとうございました。
また、お忙しい中にもかかわらず執筆いただいた皆様、ありがとうございました。
島根県HPでは、医療機関の医師募集情報（令和7年9月更新）を掲載しています。
詳しくは、

<https://www.pref.shimane.lg.jp/medical/kenko/iryo/ishikakuhotaisaku/isi-kyujin.html>

または、「島根の医師確保対策」で検索、ご覧ください。

野球でも中国地区大会に参加するなど、職種の垣根を超えた活動で、心身ともにリフレッシュして院内での一体感も育まれています。

それから院内の2階にあるレストランには定番メニューのほか日替わりランチも2種類あり、外の景色を見ながら開放的な空間で一息つくことができます。まだまだ紹介したいことは沢山ありますが、今回はこのあたりで。

今回の記事をご覧になられた皆様におかれましては、当院や日本遺産のまち益田市、益田圏域がどんなところか是非一度訪問して感じてみてください。お問い合わせも大歓迎です！

